

会報 善哉

令和4年9月1日 第55号



今回初めて曾屋薬師堂にあった薬師如来の寅年特別御開帳会場となった潭広院（西田原）

NPO 法人 秦野歴史おこしの会



喜多流 職分

神山 喜美重

はや二年もマスクが手放せない世の中が続いております。その中で必死に舞台の灯火を絶やさぬ様に活動が続けてきた能楽師について、お話ししたいと思います。

喜多流の流祖、喜多（旧姓は北）七太夫長能（一五八六年～一六五三年）

は、堺の目医者の子で、七歳の時、豊臣秀吉の前で舞った「羽衣」で名を上げ、「七ツ太夫」と呼ばれた芸の天才でした。この名が後に、七太夫（しちだゆう）となり、喜多流の家元の呼称となりました。その後、豊臣秀吉の近習となり、六平太（ロツペイタ）と呼ばれていました。このロツペイタは、ポルトガル語に由来するとも謂われ、秀吉の近くに侍（はべ）っていたことから名づけられたと謂われています。後には、この六平太を家元継承前の名として用いました。

秀吉の応援もあって、金春禅曲の娘を娶ってその流れを汲む事になります。その時代には四座の他にも、渋谷流や下間（しもつま）流と云った様々な能役者の流れがあり、七太夫は卓越した芸術的感覚でそれらをも取り入れ、一流を創り出しました。その秀でた力量が認められ、一時は金剛太夫として、また宝生流の後見役を勤めるなどの活躍もありました。

大坂夏の陣には、豊臣方の一員として戦い、落城後には身を隠していましたが、徳川家康が「七太夫はどうしている、あの能がもう一度観たい。」と言ったのがきっかけとなり、黒田藩主達が奔走して七太夫を探し出し、江戸へ

出仕させました。その間に、徳川將軍は二代目の秀忠に替わっていました。徳川家に仕えるように勧めましたが、七太夫は、武士は二君に仕えずと云って固辞しました。秀忠は、それでは今は能役者として仕えるようにと勧め、家紋もその時の引き出物の嶋台を模って喜多霞の家紋（喜多流の紋所）としました。太夫としての待遇を受け、従来の四座の別に一流の創設を認められ、七太夫流或いは喜多流と呼ばれるようになりました。

十三代目の時に明治維新となって、一時途絶えかけた喜多家でしたが、十二代目の外孫、宇津野千代造が十歳で十四代目を継承、「六平太」を名乗りました。明治維新による変革で生活も窮乏の時代でしたが、それを乗り越え明治政府との基盤の固まりとともに、能も能楽と名付けられました。各流とも次第に隆盛を極めるようになり、喜多流は特に武士気質が強く、素朴ながら豪放な芸風で、遠目にも力強さが感じられる芸風が特徴です。

秦野歴おこしの会の山田先生をはじめ、相原稔先生、杉崎正二前理事長さんには、目黒の能楽堂には何度もいらしていただき、今はただ懐かしう良き思い出となりました。

前田夕暮歌碑建立記

窪島 義文

秦野市立南小学校体育館脇楠に抱かれた歌碑の背面には、『昭和四年十一月二十八日、前田夕暮が新聞社の旅客機コメット型一〇二号に乗り、丹沢山塊の上空を飛んだ時の感動をそのままに歌った自由律詩で詩的な心が十分に表現されています。香川 進書』と出典が記されています。

さて、私が、南小学校の校長として赴任して四年目の平成六年（一九九四年）の秋、後輩で今泉にお住まいの芦川佐吉氏（蓑毛・緑水庵母屋の旧持ち主）を通して、南小出身の叔母の永樂十三江氏（平塚市豊原町・病院経営）から、大東亜戦争末期の昭和二十年、セブ島で戦死した長兄芦川一郎氏（佐吉氏の父）の五十回忌供養として、教育活動に使って欲しいと高額な寄付金の申し出があり受諾。（副碑に銘記）

そこで、秦野市教育委員会、PTA本部役員や地域の教育関係者、恩師の古屋忠春先生の助言、永樂氏らのご意向も受けとめ、さらに、児童も自然に口ずさみ、百周年の歴史ある南小学校の教育財産や学習の一助となるように



と歌碑建立が承諾されま

た。

次は、短歌の選歌揮毫す。私が所属

している短歌結社「地中海社」のT氏を介して、前田夕暮記念室開設等で度々来秦されていた夕暮の高弟、歌人・香川進先生に依頼することになり、T氏と画仙紙、老舗豆峰の落花生、清酒白笹鼓を抱え、豪徳寺駅近くの世田谷区赤堤のご自宅を訪問しました。

香川先生は、前田夕暮の口語自由律短歌の代表作として日本の短歌史に金字塔のごとく輝き、丹沢の峰々が望める南小学校にふさわしい「自然がずんずん体のなかを通過する 山、山、山」を選歌されました。

その年の暮、先生のご自宅が火災に遇い、揮毫の件を危惧しましたが、翌年の正月に入り、無事届き安堵。

本碑や副碑、台坐等については、先輩である守屋石材店の守屋光秋氏から歌碑にふさわしい筑波石のストックもあると言うことで、文字彫刻や設置工事一切をお願いした次第です。

平成七年（一九九五年）四月十八日の除幕式には、永樂氏のご親族、香川

進ご夫妻、歌碑建立の趣旨にご理解をいただいた野村昌平氏、地域の関係者、六年生の全児童が参列し、数十枚の記録写真が保存してあります。

芦川佐吉氏の祝い歌を合図に数名の児童代表が紅白の綱を引くと、鏡のような碑面に彫られた短歌が姿を現し、拍手が湧き、二十五年の時を経た今でもその光景が目に残っています。

香川進先生は、歌碑の短歌が作られた背景や崩しのある書体の異なる三つの「山、山、山」の一つ目は富士山、二つ目は丹沢の峰々、三つ目は大山等と丁寧な口調で語られました。児童代表の六年生の芦川真里菜さんの謝辞には、「香川先生のお話の中にあつたように、私たちは、これからも、うた心を大事にしたいと思います。」と素直な気持ち

が込められていました。

除幕式も終わり、五月初旬、香川先生の奥様から、「除幕式盛大でおめでとうございました。桜名木の素晴らしさに圧倒されました。今、七八分咲きの見事さを想像しております。ご寄付をされました方々にもよろしくお伝え下さい。香川進内」と礼状が届きました。

小さな歌碑建立の足跡ですが、南小の夕暮歌碑を地区巡りのコース等に入れているだけだと願っています。

寅年薬師如来御開帳に寄せて

理事長 小泉 孝

令和四年は、十二年に一度の寅薬師めぐりの年です。相模二十一カ寺にて、四月八日から十二日まで、薬師如来の御開帳が行われました。秦野市内では、大根地区の東光寺（南矢名三六六）、本町地区の天徳寺（文京町六一二二）、東地区の潭広院（西田原九八）の三カ寺です。

古来より薬師如来は身近な存在の仏として、村々には薬師堂が建立されて村人の救済をお願いする場となっていました。薬師如来の正式な名称は、薬師瑠璃光如来、またの名を薬師医王如来と申します。東方浄瑠璃世界の教主であります。皆さま薬壺をお持ちになつています。日光菩薩と月光菩薩を脇侍とし、十二神将を眷属とします。薬師如来は十二の大願（すべての人が生きるためのすべての願い）を一切の人々になえせしめたいとの願いをお持ちの仏さまです。

日光、月光菩薩は、昼夜を分け隔てなく人々の身体や心の病をいやし、十二神将は、悪魔が人々を悩ますことがあれば、いつでも甲冑に身を固めこれ

を懲らしめます。現代の世相を顧みて、疫病や災厄のない世界を薬師如来にご祈願して、ぜひ実現していただきたいものです。

東光寺の薬師如来は、古来より矢名薬師として近郊の多くの人々に親しまれ、厚く信仰されてきました。武田信玄が小田原の北条氏を攻めに來た時に薬師如来を甲斐の領国に持ち帰ったところ、疫病や飢饉が続き、その様子に恐れを覚え、信玄公は仏さまを元のところに戻し、安置するお堂まで建立しました。帰ってきた後、片手がなくなっていたことから、別名「片手薬師」ともいわれます。背面には建長八年（一



薬師如来の説明を聞く参拝者（天徳寺・市内文京町）

二五六年）の墨書の銘が見えます。この度古いお堂を取り壊した後に新たな薬師堂が建立されました。令和四年三月二十六日に落慶入仏開眼法要が執り行われました。今後、末永く多くの人々の安寧を見守り続けていただけたと思います。

医王山薬師院天徳寺の薬師如来は、かつて曾屋神社近くの乳牛薬師堂にあったとのことです。関東大震災でお堂が壊れ、現在天徳寺本堂の左間にお祀りされています。造立の年代は平安時代の後期の作と確認され、本市にとっても貴重な仏像であるとの評価を受けています。なお庭園には、江戸中期に盛んであった札所巡りの坂東札所三十三観音石像も大切に管理されています。現在「曾屋五自治会館」のある場所以前、曾屋薬師堂があり、薬師如来が祀られていました。そこには当時、潭広院末寺の慈眼寺がありました。しかし、ある時から無住の寺となり、近在の人々の手によってお堂はずっと守られてきました。その後、同地に自治会館の建設が決まりお堂は取り壊されることになり、薬師如来は平成二十七年に西田原の潭広院にお移りになりました。移転後、初めての寅年となります。

特定非営利活動法人 秦野歴

史おこしの会の成立について

副理事長 瀬戸川 勝裕

一 設立の趣旨

秦野歴史おこしの会は、平成六年（一九九四年）に市民の有志で設立され、文化財等に関する講演会、視察研修、会報『善哉』の発行等の活動をし、文化財に関する市民の認識を深め、秦野のまちづくりに寄与してきました。また、老朽化の激しい指定文化財の修復に際し、会費からこれまでに三力所の文化財に、また県指定の無形文化財にも寄付してきました。さらに平成三十一年（二〇一九年）に当会のホーム



菩提上会館で開催された総会（理事会）の出席者

ページ「秦野歴史おこしの会」を開設・運用し、広報・啓発活動を行っております。令和四年（二〇二二年）四月現在、会員数は百余名に達しています。

このような活動を展開し、歴史の里秦野のまちづくりに寄与してきたところでありますが、任意団体としての限界もあり、当会の活動及び会計状況等を公開して透明化を図り、より多くの市民の理解と協力を得て、文化財を通じての秦野のまちづくりに更に寄与するため、「特定非営利活動法人 秦野歴史おこしの会」の設立を目指してきました。

二 設立の経緯

会員各位の御努力とこれまでの活動が評価され、令和四年（二〇二二年）四月二十日神奈川県知事から「特定非営利活動法人 秦野歴史おこしの会」が認証され、四月二十二日に法人登記も完了して正式に成立いたしました。

五月十二日「設立登記完了届書」を神奈川県知事宛提出し、五月十三日に国税庁に会費、寄付金等の控除について照会した結果、「領収があればそれぞれ会員あるいは寄付者が税金控除として申告」すれば足りるという回答でありました。法人の場合、県民税あるいは市民税の対象となることから五月十

七日に平塚税務事務所長宛「法人設立届書」及び「法人県民税均等減免申請書」を五月十九日に秦野市長宛「法人設立届書」及び「法人市民税減免申請書」をそれぞれ所要の書類を添付し提出（申請）致しました。

三 目的と事業

今後は、特定非営利活動法人としてその目的（この法人は、秦野市内に住民に対して、秦野市内の文化財の調査・支援・教育及び広報啓発等の事業を実施し、歴史の里秦野のまちづくりに寄与すること）と、それに基づく事業（一 文化財に関する支援事業、二 市民に向けた教育事業、三 市民と文化財をつなぐ広報・啓発事業）を推進しなければなりません。各役員の方々の御活躍と会員各位の皆様の御理解と御協力をお願い致します。以上、「特定非営利活動法人 秦野歴史おこしの会の設立」について会員の皆様に御報告いたします。

四 成立後の報告義務

成立後は、事業年度終了後三カ月以内に前年度の事業報告・活動計算書、前事業年度の貸借対照表・財産目録、年間役員名簿、前事業年度末日における社員のうち十名以上の者の名簿の提出が義務化されます。

禅の歴史と精神 (第三回)

愚閑道場 愚閑勝裕 (瀬戸川勝裕)

三 五家七宗の発展

六祖慧能の門下に南嶽懷讓 (なんがくえじょう 六七七〜七四四年) と青原行思 (せいげんぎょうし ?〜七四〇年) が輩出し、更に南嶽の下に馬祖道一 (ばそどういつ 七〇九〜八八八年)、百丈懷海 (ひやくじょうえかい 七四九〜八一四)、黄檗希雲 (おうばくきうん ?〜八五六年)、臨済義玄 (りんじぎげん ?〜八五六年) と、青原の門下に石頭希遷 (せきとうきせん 七〇〇〜七九〇年)、薬山惟儼 (やくさんいげん) 雲叢曇晟 (うんがんだうじょう) 洞山良价 (どうざんりょうかい) と受け継がれたのです。南嶽懷讓の法系からは臨済義玄が臨済宗を、仰山慧寂 (ぎょうざんえいさく) が偽仰宗を開きました。一方、青原行思の法系からは洞山良价が曹洞宗、雲門文偃 (うんもんぶんえん) が雲門宗、法眼文益 (ほうげんぶんえき) が法眼宗を開き、五つの宗が生まれ、また臨済宗の系統から黄龍派と楊岐派の二派が生まれ、日本の禅宗の草分けである栄西は、黄龍派の臨済禅である。

この五家七宗の時代は、中国禅の全盛期でありました。しかし、宗派に分かれていましたが、禅の教えに相違が生まれたのではなく、同じ禅をどのようにに發揮するかという指導者の指導の手段の相違に過ぎないものです。

後に臨済宗楊岐派の中峰明本 (ちゅうほうみょうほん 一二六三〜一三二三年) は、五家の家風の特徴について「臨済は痛快」、「偽仰は謹嚴」、「曹洞は緻密」、「雲門は高古」、「法眼は簡明」と述べている。

四 臨済宗の看和禅と曹洞宗の默照禅の発展

南宋禅の五宗のうち偽仰宗は宗風が振るわず宋代に入つて臨済宗の中に入り解消し、雲門宗は「碧巖録」の土台を作つた雪竇重顕 (せきちやうじゅうけん) の代に一時大いに栄えたが、南宋の時代に衰え、元の時代に滅びてしまった。法眼宗は法眼の法嗣の天台徳韶 (てんだいとくしょう) の時、一時栄えたが百年間続いただけで北宋末に法系が絶えてしまった。

これに反して宗風がますます振るい、中国の禅界を二分したのが臨済宗と曹洞宗である。先に述べたとおり禅におけるこの分派は、その教えの相違によるものではなく、それぞれの指導者の

指導上の手段の相違に過ぎないものである。しかし、いったん分派が生まれると、互いに対立するようになり、その中でも臨済宗と曹洞宗が最も盛んになり、そこに立場の相違が見られるようになった。

曹洞宗を開いた洞山良价の門下の曹山本寂 (そうざんほんじやく) ・雲居道膺 (うんごどうよう) の法系は、おだやかで綿密な宗祖の宗風を伝えて着実な発展を遂げた。碧巖録と共に禅門の二大聖典とされている従容録 (しゅうようろく) の原本をつくつた宏智正覺 (わんししやうがく) は雲居の法系に属し、また、曹洞宗の特色である只管打座 (しかんだざ) の宗風を大いに鼓吹弘布し、曹洞宗史上傑出した禅僧である。日本曹洞宗の祖・道元が師事した如浄 (によじょう) 禅師はこの雲居道膺の法系を引くものである。

臨済宗の大慧宗杲 (だいえそうこう 一〇八九〜一一六三年) は、禅の修行に公安の工夫を取り入れ、これによつて修行僧の境涯を深めていく方法をとつた。「公安」とは、それ以前の禅師たちの優れた行いや言葉を題材にしたもので、その真意を考えさせることによつて、悟りを得させようとしたものである。これを「看和禅」と言う。(続く)

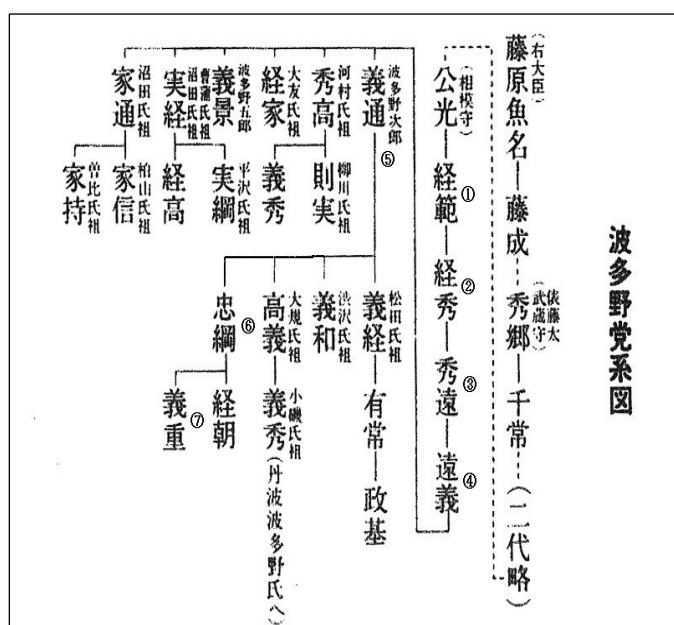
波多野氏と鎌倉殿

—源氏との結びつきと石橋山の合戦—

小沢 恵一

治承四年（一一八〇年）源頼朝伊豆で挙兵、石橋山合戦で敗れるが、その後わずか二カ月後に十万の兵を携え鎌倉に入城し日本で最初の武士の政権鎌倉幕府を開く。このとき源頼朝に加担しなかったことにより、西相模の豪族波多野氏一族は数奇な運命をたどる。

秦野の地名の由来とされる波多野氏一族は、平安時代の半ば藤原秀郷の子孫とされる藤原秀郷から四代藤原公光が相模の国司の時、もともと河内源



氏の家人として仕えていた、佐伯経範が国司の目代（代理）として波多野荘に土着して、開発領主としての初代波多野経範を名のり、西相模に勢力を伸ばす。この波多野経範は前九年合戦で源頼義・義家に仕え軍功を挙げながらも黄海の戦いで討死したが、一族は代々続く。

藤原氏系波多野氏は平安時代末期から鎌倉時代にかけて、摂関家領である相模国波多野荘（現神奈川県秦野市田原付近）を本領とした在京役人で、坂東武士としては珍しく朝廷内でも高い位を持った文武両道の貴族武士である。一族は代々、従五位下権守等に任官している。経範から四代目の子孫・波多野義通は源頼義の子孫である源義朝に仕え、その妹は義朝の側室となつて二男朝長を産む。保元の乱・平治の乱でも義朝軍の重鎮として従軍しているが、保元の頃に義朝の嫡男を廻る問題で不和となつて京を去り、所領の波多野荘に下向したという。五代目義通の子波多野義常（従五位下右馬充（うまりよう））は京武者として京の朝廷に出仕し、官位を得て相模国の有力者となる。義朝の遺児源頼朝が挙兵すると、義常は頼朝と敵対し、討手を差し向けられて松田館で自害した。

この時代を「東鑑」には、治承四年（一一八〇年）七月、源頼朝の軍勢催促を拒否。波多野氏の頭領波多野義常は頼朝挙兵の誘いの使者、安達藤九郎盛長に対して冷たくあしらひ、「波多野義常と山内首藤経俊は呼びかけに応じないばかりか、いくつもの悪口さえ言っている。」と記録されている。

治承四年八月石橋山合戦、一族の中で河村郷（現山北町）に領土を持つ河村義秀（波多野義常の次弟）は、平家側の大將大庭景親に恩を感じ大庭軍に参陣し、大庭景親と行動を共にし頼朝軍と戦う。

治承四年十月、波多野氏の頭領波多野義常に鎌倉源頼朝より追討令が発せられると追討軍（下河辺行平）の到着前に波多野義常は松田館で自害する。同じく十月、富士川の合戦では、大庭景親・河村義秀は平家側として千騎を率いて出陣するが、足柄峠で群衆する源氏軍に阻まれ、平家の大將平維盛軍に合流できずその場で軍を解散し、河村山（河村館）にこもり、数日後源氏側の兄大庭景義を頼り頼朝に投降する。戦後処理として、波多野本領は義常の次弟波多野忠綱が継ぎ鎌倉殿の御家人になり、後に実朝公の御首を守り、田原の地が歴史の舞台に登場する。松

田および河村領は縁者である大庭景義の管理下に入る、波多野義常の嫡男有常はのち許されて、松田有常を名のり旧領を安堵され、子孫は戦国大名北条氏の筆頭家老となる。河村義秀は大庭景親とともに断首を命ぜられるが、大庭景義に匿われ、十年後鎌倉八幡宮での流鏑馬神事で妙技を発揮し許され、旧領を安堵され御家人に加わる。

敗者である波多野一族が源頼朝に敵対しながらも滅ぼされなかったのは、京都での地位・官位が優れ、単なる荒くれの坂東武者と違った気高い気品を頼朝が悟ったのではあるまいか。作家永井道子の『相模の武士たち』では、相模の雄「海の中村・山の波多野」と大いに賞されている。



山門に源氏の家紋を表す
田原の金剛寺

<https://www.hadano.org/>

NPO法人秦野歴史おこしの会
神奈川県秦野市域の歴史文化遺産を後世に伝える

秦野歴史おこしの会の会報誌「善哉」がオンラインで開...
市民の意を募集中

検索

秦野歴史おこしの会

★ホームページが新しくなりました
秦野歴史おこしの会のホームページが新しく生まれ変わりました。ぜひご覧ください。

平床 孝 北地区
山本 隆浩 東地区
藤木 玲子 西地区
古谷 一郎 西地区
今井 尚子 南地区

★新入会員です よろしく

※講演会終了後、会員対象の懇親会を開催します。

◆講演会のお知らせ◆

令和四年九月三日（土）

午後一時～

演題「柳川村与兵衛と漆あきない

— 秦野地域と漆 —

講師 桐生海正先生

県立足柄高校教諭

◆表紙の題字

「善哉（よいかな・よきかな）」

揮毫 蓑毛山寶蓮寺

三十三世住職 東島光明師

『寶蓮寺真名縁起』によれば、聖武天皇の命を受けた行基と良弁が、伊勢の皇大神宮に赴き大仏造立の願いが叶った時、歓喜して舞い、歌い、言ったことばが「善哉、善哉、時哉、時哉」である。・会報第三号から要約

★編集後記

秦野歴史おこしの会がNPO法人として認証されて初めての会報となります。新型コロナウイルスが感染拡大して二年以上が経過し、私たちの暮らしも、ウイルスと社会活動との共存へと舵をきりつつあります。研修会、講演会、調査研究など会の活動も少しずつ平常に戻り、会報の中身も充実させていけることを期待しています。

★「善哉」への投稿依頼

旅先で出会った文化財の思い出、独自の研究成果などがありましたら、お気軽にご投稿ください。

事務局

秦野市蓑毛三四四―一四

瀬戸川 勝裕 宅

電話 〇四六三―八四―三六三二